

# 日本文化の底流で跳梁する妖怪たち

小松和彦

妖怪はいつの時代にもどこの国にも存在している。人知ですぐには解き明かしえない不思議な出来事に遭遇したとき、人はそのような出来事を説明するために、架空の存在つまり妖怪を作り出すからである。

しかし、妖怪はいつの時代でもどこの国でも同じ姿かたちをしているわけではない。不安や畏怖の念から生み出された妖怪は、その国の歴史や文化というフィルターを介して、独自の姿かたちをとって立ち現れる。日本の妖怪も同様である。

日本の妖怪文化は奥が深く豊穡である。日本文化をどのような角度から深めていっても、必ずや妖怪に出会うことになる。なぜなら、妖怪は神道や仏教といった宗教的な領域に限定された存在ではなく、文学や絵画、芝居、コミック、アニメーション、さらには玩具・日常用品といった大衆文化・生活文化の領域にまで浸透しているからである。このため、妖怪は日本文化に興味をもつ外国人の目にも止まり、妖怪を表象した文

物が収集の対象にさえなっている。

妖怪という言葉は、今日広く用いられているが、明治時代になって学術用語として使われ出したという事情もあり、日常語としてはまだ未熟である。むしろ、おばけ・化け物・変化・鬼・魔物・あやかしなどといった呼びの方がはるかに広く流通している。とくに妖怪文化が大きく開花した江戸時代では、「化物尽し」とか「化物草紙」「化物話」などという言葉からうかがえるように、「化け物」という言い方が一般的であった。

日本の妖怪にも長い歴史がある。古代神話のなかの、頭と尾が八つで胴が一つであるというヤマタノオロチは、山や川、嵐などの天変地異への畏怖から生み出された自然・動物の妖怪の代表である。大蛇・龍系の妖怪の伝統は、のちに猿神や狒狒さるがみ ひ ひなどという同類を生み出し、近年のツチノコ伝承やフィクション世界のゴジラにまでつながっている。

中国の鬼の影響を受けつつ生み出された日本の鬼も、大蛇・龍とともに、古代から現代まで人びとの心をとらえ続けきた妖怪である。鬼の姿かたちは日本人ならば誰でも知っている。しかし、鬼が鬼になるまでの来歴が千差万別である。死者も鬼になる。生きながらにして鬼になる者もいる。疫病や雷や風の猛威も鬼として表現され、異人・異邦人も、地獄の獄卒や龍宮などの異界の住民も、鬼として表現された。さらに中世になると、道具の妖怪たちも鬼の仲間として登場してくる。いわゆる「つくも神」と呼ばれる古道具の霊たちは、自分たちに感謝の念を示すことなく捨てた人間どもに鬼となって復讐しようとした妖怪であった。

このように、中世の妖怪たちの多くは鬼の子孫なのである。

天狗は仏教文化のなかで培われた妖怪で、平安時代から登場してくる。天狗はもともとは仏教を滅ぼすために、僧侶を魔界に転落させるために出現した。だが、やがてその活動領域を世俗の政治の世界にまで広げて王権破壊者となり、民俗的世界に入ると神隠しなどを引き起こすどこか間抜けな山の妖怪に変貌した。

実在の動物でありながら幻想動物でもあった狐や狸も、中国の影響を受けて作り出された妖獣である。変化の術を心得ており、鬼や天狗の性格を部分的に受け継ぎながら、人や物に化けて人をたぶらかすトリックスターとしての歴史を歩んできた。ときには狐狸と一括されるが、対比されるときは、狐には狡猾な、狸には滑稽なイメージが託された。

日本の妖怪は数えきれないほど種類が多いことを特徴としている。しかし、古代や中世までは、鬼や大蛇・龍、狐、百足、蜘蛛などに妖怪種目は限られていた。ところが、江戸時代になると、その数が急増することになった。その主たる原因は、さまざまな怪異現象や不思議な存在を、霊、鬼や天狗、狐狸といった限られた妖怪存在に結びつけて説明しようとする、古代や中世のような思考様式が後退してしまったからである。

これに代わって台頭してきたのが、「名づけ」を通じての妖怪の個別・細分化である。たとえば「あずき洗い」は、もともとは亡くなった若い僧の霊とか狐狸のたぐいが引き起こす怪音とされていた。ところがその怪音を「あずき洗い」と名づけることを通じて、若い僧の亡霊とか狐狸

の仕業という説明が脱落し、「あずき洗い」という存在が「あずき洗い」と呼ばれる怪音現象を作り出す、というふうになったのである。

日本の妖怪文化は江戸時代中期に大きな変貌を遂げている。「名づけ」もそうであるが、決定的な変化は娯楽化である。それまでは、妖怪は人知が及ばない不思議な現象や存在への畏怖や不安、恐怖から生み出されてきた。ところが、江戸時代の都市民たちは、合理的思考の発達とともにその多くが架空の存在であることに気づき、妖怪を娯楽の対象として扱い始めた。宗教的・信仰的なコンテクストから切り離すことによって、人びとは楽しみのために妖怪を創造することができるようになったのである。これを契機に妖怪は限りなく増殖していった。

人びとを楽しませる存在となった妖怪は、日常生活のさまざまな領域に入り込んでいった。江戸時代には、絵本や小説、錦絵、芝居、玩具、さらには着物のデザインや装飾品にまで描かれたり彫刻されたりするようになった。たとえば、印籠や櫛、根付、煙草入にも、魔よけも兼ねて、伝説や芝居に題材をとった鬼や狐などの妖怪の姿をあしらったものが作られた。そのようなものを身につけるのが「粋」だったのだろう。

日本の妖怪文化の歴史にも盛衰がある。たしかに、信仰的对象としてあるいは実在の存在とされる妖怪は衰退の歴史をたどっていた。しかしながら、日本の妖怪はその伝統・歴史をふまえながら、その活躍の場をフィクションの世界、娯楽の場に変えることで繁殖を続け、現在でも日本列島を跳梁し、ときには海外にまで雄飛しているのである。